

ぼくはご
バツトと

心配事

4
転校したくな
い

1 工
2 刀
3 𠂇

111

7 I
生きな
い
II
飼い
捨て

5
ア
6
お
も
ち
や

限られ人間は効率化

1 A

B

C

2


群
れ
し
い

4

- 1 福
- 2 整列
- 3 藥局

配点
各2点× 6 = 12点
各4点× 22 = 88点
(計) 100点

1

- 1 「福」は「復」や「副」などの同音の字を書かないよう気をつけよう。「福」は「幸せ」、「幸運」という意味を持つ字である。
- 2 「整」は右上のぼくによく三画で書かないよう、「列」は「死」のように一画目を右側までのばして書かないよう気をつけよう。
- 3 「薬」は九画目と十画目、十一画目と十二画目をそれぞれ続けて書かないよう気をつけよう。
- 4 さほど難しい字ではないので、確実に正解してほしい。「庫」はものをしまつておく建物、倉を意味する字である。
- 5 これも字形は易しいが、話し言葉ではあまり使わないことばだろう。非常に多くの意味を持つたことばで、文章中では「解き放つ」という形でよく使われる。
- 6 「熱」や「厚」などの同訓の字を書かないよう気をつけよう。「暑い」は気温の場合に使い、反対は「寒い」である。「熱い」はものの温度の場合に使い、反対は「冷たい」である。「厚い」の反対は「薄い」である。

2

- 1 それぞれ段落の冒頭にある接続詞なので、前後の段落全体の内容に視野を広げて考えよう。(A)は前に「飼い慣らした」とあるのに対して後には「肉食の猛獣である」ということが書かれているので「しかし」があてはまる。(B)は前後に「オオカミは外敵であった」、「限られた食糧を分け与えなければならぬ」という、オオカミ(イヌ)を飼い慣らそうとするばがない理由が並べられているので「しかも」があてはまる。(C)は後に長い時間が経過したということが述べられているので「そして」があてはまる。

- 2 説明的文章の冒頭に問い合わせがある場合は、本文を通読する際にその答えとなる部分を見つけておくようにしたい。「最近の研究では」ではじまる段落で最新の仮説が紹介されている。
- 3 謎が「多い」とあるので、並列に注目して読んでほしい。まずは——線部を延長して読むことで「どのようなことに対する謎なのか」をつかんで、後続部分から答えをさがそう。
- 4 問2で考えたように、もともとオオカミの方から人間に近づいたということになっているが、人間側に何のメリットもなければわざわざパートナーにはしないだろう。人間にとつてオオカミ(イヌ)は、どのように役に立つたのか。
- 5 「ふさわしくないもの」を選ぶということに気をつけよう。(4)の前後のつながりから、この空欄にはいるのは「愛玩犬の仕事」であるとわかる。「人間に守られる」のでは「仕事」とは言えない。
- 6 (5)の前に「まるで」とあるので、比喩的な表現がはいるとわかる。イヌはどのように買われていくのか、と考えるが、そうして買われていったイヌたちが、買われたときと同様に「おもちゃのように」飽きられて捨てられる、ということである。
- 7 ——線(6)の直前には「これが」とあり、指示内容は直前にあると考えられる。あとは(5)の文をヒントにしてさがしていけばよい。

3

- 1 安易に本文中にあることばを選ばないようにしよう。光輝は「引っ越しされたとしても転校はしたくない」のだということが文章全体から読み取れる。では転校したくないのはなぜか、と考えを進めればいかにしほれるが、グッピーの世話をすることだけが転校したくない理由だというわけではないので工に決まる。
- 2 (A)は「クッキーを五枚食べるうちに」とあるので、ゆっくりとつかえながら話している様子を表す「とつとつ」があてはまる。(B)は直前で母さんからどうしても転校せざるをえないという話を聞かされた光輝がいろいろなことを考えている様子なので、頭の中にいろいろな思いが巡っている様子を表す「ぐるぐる」があてはまる。(C)は光輝が涙を流していく、「声を出そうとしても」(C)という音しか出なかつた」ということ、またその二行後の「しゃくりあげながら」という表現から「ひつくひつく」があてはまる。
- 3 母の様子を見て「いつもどちらがう」と感じているのである。——線(2)の直前の「やつぱり」という表現からは、ここ以前にもそういうふた様子があつたということがわかる。本文冒頭に「めずらしくクッキーを焼いていた」とあつた。
- 4 (5)の文を読めば(4)には「ぼくの願い」がはいるということがわかる。——線(3)の二行後で「転校だけはしたくない」と言っているが字数が合わないので、本文三行目の「転校したくない」が答えになる。
- 5 アホの選択肢を横向きに見て、(4)は「緊張」と「期待」の二種類しかないと気づきたい。——線(3)で願いを聞いてくれると「期待した」光輝に母さんは「でもね。」と返しているので、(4)には「緊張」があてはまる。(5)は「いやな」からのつながりで「予感」があてはまる。(8)では、我慢していた気持ちを先生が分かつてくれた、という安心の涙を流している。
- 6 直前の母さんのことばに対する光輝の反応である。自分の幼さ・頼りなさのせいで新しく仕事を始める母さんの「心配事」になってしまふのが、と考えると光輝はこれ以上自分の願いを主張できなかつたのであろう。
- 7 ここで「仕方がないこと」とは「転校すること」であり、これを光輝に「仕方がない」と思わせたのは母さんであった。本文前半の場面に戻り、母のことばのなかからさがしていこう。
- 8 自分の気持ちを押し殺している様子は本文中の多くの部分に表れているが、我慢する気持ちが具体的な「行動」として表出していると考えられるのは本文前半の最終行にある「牛乳を飲む」という行動と、——線(7)の四行前の「唇をかんで、首を横に振り続けた」「バットとグローブを押し入れの奥にしまつた」という行動に絞られる。それぞれ「転校したくない」という気持ちと「友達とたのしく野球がしたい」という気持ちを我慢しようとしているのである。